

バカとテストと召喚獣 ×俺ガイル

若葉キラウエア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺ガイル×バカテスの二次創作です。

バカテスの舞台に俺ガイルキャラクターを投入しました。いろいろとキャラが変わっていたりおかしいところがあるかも知れませんがご了承ください。その場合は指摘していただくとありがたいです。かなり原作を引用しています。

目次

序章	—	1
問 1 (1) 自己紹介	—	4
問 1 (2) 引き金	—	13

序章

比企谷八幡は高校二年生の春、とてもワクワクした気持ちで学校へと歩いて行った。なぜか？そう、この俺が通う文月学園では二年生のクラス替えがとても大きく影響するからである。

「比企谷、遅刻だぞ」

校門の前でとてもいかつい岩みtainな男に呼び止められた。

「おはようございます。西村先生」

軽く挨拶をする。相手は生活指導の担当の先生西村。

みんなからは鉄人と呼ばれている、理由は趣味のトリアスロンからつけられた。

「どうした比企谷、初日から遅刻か？」

「はい確かに遅刻はしました。だが聞いてくださいそもそも遅刻は悪いものなどではなく……」

「あーもういい。お前のそのひねくれた意見は聞き飽きた」

軽く流された。くそ、今から俺の遅刻の正当化の論文を長々と話そうと思ったのに。

「とりあえずこれを受けとれ」

そういつて先生が封筒を俺に渡してくる。封筒には大きく比企谷八幡と書かれていた。

「うっす」

こう返事をして受けとる。

「もうだいたいの生徒はクラスごとに別れたぞ。あと受け取っていないのは比企谷と吉井ぐらいだ」

吉井、という名前は一年のころ何度か聞いたことのある名前だ。どうにもとんでもないバカみたいで。

そんなことより今、俺はとても緊張していた。

この緊張を表すなら細胞レベルで緊張している。

俺の通う文月学園はクラスがAからFまであり二年生以上はAから順番に振り分け試験の成績順でクラスが決まる。頭のいい人はAクラス、悪い人はFクラスというわけだ。そしてクラスごとに設備も全く違う。上のクラスはとても豪華だが、したのクラスは学校とは思えないレベルの設備だ。なんとしてもFは避けたいところだ。

「比企谷、お前は現代文はよくできていた、しかし数学は全くだ」

そう俺は現代文を含む文系はいいレベルだが逆に理数系は全くできない。だからあいだをとってCクラスが妥当かなと思った。

「さて、どのクラスかな？」

封筒をあけて中身を見た、その時のワクワクと緊張はとても気持ちのいいものだった。しかし中身を見た瞬間にその気持ちはすべて消えた。

比企谷八幡　　Fクラス

その文字を確認する時間5秒。時が完全に止まった。

ははは、なんかの冗談だろ？なあ冗談だと言ってくれよ、なあ!?

俺がパニック状態になってると西村先生がこう言った。

「名前を書き忘れるなんてそんなバタなことやる高校生もいるんだな、なあ比企谷」

「は、はは。そんなバカいるもんなんですね」

俺は乾いた返事しかできなかった。

こうして俺のFクラスでの地獄のような一年間が幕をあげた。

問1 (1) 自己紹介

俺はとても憂鬱な気分で自分の新しいクラスへと向かった。くそ、なんてことだ、まさか俺がFクラスとは考えてもいなかった。Fクラスに向かう途中、ひときわ大きくて豪華なクラスが目に入った。ああ、これがAクラスか。一人一台のパソコンに個人エアコン、その他いろいろな設備が揃っている。

「皆さん、これから一年間Aクラスでしっかりと学んで行きましょうね」

Aクラスの担任であろう先生が前でそう話した、そして続けてこう言った

「それではこのクラスの代表であります霧島さん、皆さんに一言お願いします」

「……はい」

名前を呼ばれ席を立ったのはこの学年でトップの成績を叩きだしたエリート霧島翔子だ。一年のころ陰キャだった俺でも知っている秀才で容姿も整っているまさにパーフェクトウーマン。その美貌から一年のころは告白される数がとんでもなかったみたいだがすべて断つたらしく同性愛説も浮上している人物。

「……これから一年間よろしくお願いします」

短い挨拶を終えると再び先生が前にきて

「はい、ありがとうございます。これからこのクラスは一年間代表の霧島さん、副代表の雪ノ下さんがこのクラスを引っ張っていくからみんなよろしくね」

今の先生の会話の中で聞き覚えのある名前が出てきた。

雪ノ下雪乃、彼女も容姿端麗で秀才で有名な人物。

しかし癖のある性格のせいであり友達はいない。

でも俺はあいつとそれなりに会話はできる、その理由は……

「こんなところで何をしているんだ？」

その声のする方を見ると先ほど校門で会った西村先生が不思議そうな目で俺を見ていた。

「いや、何でもありません」

俺はすぐにその場から逃げるように立ち去った。

しかしAクラスの教室はよかった。ここまでAクラスの設備がいいならFクラスの設備もそれなりにいいのでは、という希望を持っていた。この時までには。

俺はFクラスの教室の前に来て不安になった。

クラスプレートは木でできていて今にも壊れそうな木。

この時点で俺のさつきまで持っていた希望が少し薄れた、そして教室の扉を開けたとたんその希望はすべて消えた。椅子もなければ机もない。おまけに窓は少し割れて

いる、世紀末みたいな教室。なるほどこれが格差社会か、うんよくわかったぞ。

「おい、そこでつつ立つている奴、早く座りな。座る場所は自由だ」
教壇にたっている男性からそれを言われた。

その男性は身長が高く、だいたい180センチ位、細身の体ではあるがボクサーみたいな機能美な体。顔つきは野性的な顔。短い髪の毛がツンツンとたっている。俺はその男性を少し見ただけでこれだけの特徴を把握できる。趣味が人間観察の人にしか手にいれることのできないスキルだ。

「あ、はい。了解しました」

今俺は敬語を使ってしまったがその男は学校の制服をきていて決して教師などではなくおそらく俺のクラスメイトであろう人物。だが陰キャである俺は特有の敬語を使ってしまった。あるよね？こういうこと、とりあえず知らない陽キャそうな奴には敬語を使っちゃうこと。今俺の中の全俺が賛成した。

しかし、いきなり好きなどころに座れるなんてこのクラス大丈夫か？

それも先生ではなく生徒が決めるなんて。

さて、どこに座ろうかなと考えてもいると

「おい、八幡！ 我の隣に座ってくれー！」

そんな声が聞こえたがおそらく幻聴だろう。

だが仮にその声が本当に聞こえた声ならその声の主はおそらく小太りの眼鏡をかけて手袋をしている人物だろう。

「おい八幡！聞こえてないのか？早くきてくれ八幡！」

「そんな俺の名前を呼ぶな、材木座」

俺の名前をそんなに言われたらさすがに無視はできなかつた。

こいつの名前は材木座。めんどくさいのでしたの名前は割愛させてもらおう。俺がこの学校で話せる少ない人物の一人でとにかくうざりたい。さらにそのうざったさに中二病という厄介な属性までついている訳だからそれはもうとてつもないだるさ。

「お前の隣に座るとか、地獄かよ」

そういいながらも俺は他に空いてる席も少なく知らない人物の隣にいきなり座るよりはまだ材木座の隣の方がマシだという判断を下した。とても苦渋の決断ではあつたが。

「なんだお前もFクラスなのか、そんなに頭悪かつたつかお前？」

「いや、我はな、その振り分けテストの日にとあるウイルスと戦っていてな、それに手を焼いてしまつて行けなかつたんだ」

「なるほど、つまり風邪を引いていたということだな」

「ま、まあそんなところではあるがな実は……」

「ああよくわかった。もう喋らなくても十分だ」

材木座の話がこれから長くなりそうなので朝西村先生が使った必殺、会話切りを使った。

しかしまあ改めてこのクラスを見たがひどいクラスだ。

俺が今座っているのも綿がほぼない座布団だし机の代わりにボロボロのちゃぶ台。こんなので勉強なんてできるのだろうか？ まあもともとFクラスのやつらなんて勉強できる環境なんて求めてはいないか。

ガラガラガラ、バキッ

扉を開けて今度はしっかりとした先生らしき人が入ってきた。今扉が壊れる音しかけど本当にこの教室大丈夫だよ？ 震度1ぐらいで壊れたりしないよ？

「皆さん自分の座布団の上に座りましたか？ 不備があれば後で先生に申してください」

この21世紀に学校で座布団の上に座ってくださいというパワーワードを聞いたことがあるだろうか。

「それでは今からHR（ホームルーム）を始めます。私は担任の福原です。よろしくお願います。それでは今から先生から二点ほどお話が……」

バキバキバキッ

「たった今教卓ガラガラ壊れたので工具をとってきます。

皆さんは自己紹介をしていてください」

今先生が教卓に触れてもいないのに教卓が足元から崩れ落ちた。これ本当にあつた怖い話で採用されるな。

それはともあれ先生がいなくなり教室は動物園のようにうるさくなつたが、また先ほどの男が崩れた教卓の前にたつた。

「みんな聞いてくれ、今から自己紹介をする。こんなクラスでもどんな奴がいるか気になるからな。俺はこのクラスの代表の坂本雄二だ。これでもこのクラスで試験の結果が一番よかつたからクラス代表になつた。一年間よろしくな」

あの男はこのクラスの代表で坂本というのか。よし覚えたぞ。これでも記憶力には自信がある。

この坂本を皮切りにみんなが各々自己紹介をしてくがまあ、わりと普通だな。そんな中少し変わった人が自己紹介を始めた。

「……土屋康太」

その男は小柄な体格をしていて自己紹介がとても少なかつた。見た目はそんなに目立たないが彼の目からは何か暗殺者のようなそんな鋭い気迫を感じられた。おそらく何か隠れながら何かをやっているのだろう、そんな感じが俺の生きている経験から推測

できた。

そして次の奴の自己紹介も変わっていた。

「わしは木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。よく間違われるが男じゃぞ」

そう話した奴は面白い冗談を交えながら話していた。

だつてあんなに可愛い見た目をしていて男な訳がない。

確かに話方はジジイ口調だがあの見た目で男だつたら俺今日から男もいけるぞ。後で本当に男なのか聞いてみよう。

この学校に来てから初めて自分から声をかけたいと思つた奴が現れた。

そしてまた自己紹介は進んでいったがさつきから男ばつかだ。どうりで少し男臭い訳だ。そんなことを考えていると俺の番に回つて来た。まあ俺の名前なんて有名でもないし適当に済ませるか。

「俺の名前は比企谷八幡、みんな一年間……」

俺が名前を言つたとたんにクラスがざわつき始めた

「比企谷つてあの比企谷か？」

「確か文化祭で女子を泣かしたとか」

「その他にも色々伝説があるぞ」

「あの雪ノ下さんと会話のできる数少ない男子つて噂もあるらしいぜ」

おいしい、マジかよ皆俺のこと知ってるのかよ。俺のこと好きすぎか。

好きだとかそんな訳がないことぐらいは知っていたがまさかこれほど有名だとはな。

そう俺は一年生のころ色々と問題を起こしてしまった人物だ。そんな問題あんまり知っている人いないかと思っていたが、まさかこれほど情報が伝わるスピードが早いとはな、舐めていたぜ。

まだクラスがざわついているなか俺は静かに座った。この状態で話しても意味なんてないしな。そしてまもなくそのざわつきも収まりまた自己紹介が始まる。そして今度は自分から女だと言ったこのクラス初めてのれつきとした女子が現れた。

「私の名前は島田美波と言います。得意な科目は数学で、

苦手な科目は、えっと、私は育ちがドイツなので日本語の読み書きが苦手です」

そんなことを話した彼女は島田と言うらしい。そしてそいつは続けてこんなことをいっていた。

「趣味は吉井明久を殴ることです★よろしくお願いします」

なんて暴力的な奴なんだ。このクラスの女子にかわいさなんてあつたもんじやないな。それにしてもその吉井って奴は可哀想だな。ん？吉井って聞いたことがあるな。そして次の人が自己紹介を始めた。

「コホン、えー先ほど島田さんからひどい紹介がありました僕が吉井明久です、えー皆さ

ん一年間よろしくお願い致します」

あー、こいつが吉井か。見た目は普通だがその頭の中に入っている脳みそがとてもその悪いようで有名な人物だ。まあFクラスにこいつはいるだろうと思っていたが案外普通そうな奴なので安心した。

そしてその後も淡々とただ名前を言うだけの自己紹介が続いていく。あ、途中材木座の自己紹介で教室に氷河期が到来したことは置いといて、まああいつには最悪のスタートだったが頑張ってもらいたい。そんな作業みたいな時間が退屈で寝そうになった時だった

ガラガラガラ

「あの、遅れて、すいま、せん」

『えっ?』

遅れて入ってきた人物にクラスの皆が驚いた声をあげた。

問1 (2) 引き金

そしてまたクラスがざわつき始めた。普段はあまり動じない俺だが、今は少し動じている。

なぜなら今入ってきた人物は本来このクラスにはいてはならない人物だからである。みんながざわざわしている中、クラス代表である坂本は落ち着いて話しかけた。

「おお、ちょうどよかった。今、皆自己紹介している最中だな。姫路お前もしてくれ」「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。皆さんよろしく願います」

小柄な身体をさらに縮こませるようにして声をあげた姫路。

彼女もまたとても可憐な見た目をしていて、男子人気の高い女子。どこか小動物みたいなそんな可愛さがある彼女はこのFクラスに似合わない見た目ではあるがそれで皆驚いたわけではない。

「すいません姫路さん！質問があります！」

一人の男子生徒が元気よく手をあげた。

「は、はい！なんででしょうか？」

突然の質問に驚く姫路。

「なんで姫路さんがここにいるのでしょうか？」

とても失礼な質問にも聞こえるが正直俺もその質問をしたかった。まあ陰キャラボッチにいきなりそんなことはできないけどな。

彼女は一年のころから頭がいいことで有名であるAクラスの雪ノ下や霧島に肩を並べるほどの頭の持ち主。そんな彼女がこのまさに勉強ができないやつらの集まりであるFクラスになぜいるのか？

それはおそらく皆が思っていることだろう。

「そ、そのえつと、実は」

姫路が小さな声でしゃべり始めた。

「振り分け試験の日に、高熱を出してしまつてそれで……」

それを聞いて皆が納得した。

なるほどつまり姫路はこの俺の隣にいる小太りの男と同じ理由でこのクラスにいるということか、可哀想に。

しかしこれでこのFクラスの学力もわからなくなってきた。姫路はもちろんそうだし隣の材木座も少なくともEクラス以上の学力はある。そしてなんとितてもこの俺だつて現代文学年3位の実力の持ち主だ。もしかしてこの先にあるこの学校最大の売りである戦争に勝てるかもしれないしな。

「姫路、俺はこのクラスの代表の坂本だよろしくな。席は自由だがあと2つしか空いてなくてな、比企谷の隣に座るか吉井の隣に座るのか」

うっ、これは姫路も選びずらいだろう。なんせどっちも…:

「あの、吉井君の隣でお願いします…:」

即決めだった。え、え、なんで？まさか俺嫌われてるのかな？八幡とつてもかなしい。

「いいのか、あんな不細工の隣で？あいつはとてもバカで不細工だぞ」

「雄二！それはひどいぞ！確かにバカかもしれないけど顔はそこそこいい顔しているもん！」

「すまない姫路。あいつはこの世界に鏡と言うものがあるのを知らないみたいだ」

「い、いえ。そのそれでも吉井君の隣で大丈夫です」

坂本が吉井の隣に座るのを止めようとしていたがそれでも姫路は吉井の隣に座るところを選んだ。

「八幡、ドンマイ」

「うるせえよ」

材木座に半分哀れみ、半分からかっているような目で見てきた。くそ、殴りてえ。

しかし俺ってそんなに嫌われているのか？確かに一年生のころ色々起こしてしまっただが、その、なんだ、顔はそこそこ整っているぞ。目以外はだけど。

俺がこの数分でできた深い傷を自分で慰めていると坂本が話を進めた。

「よし、これでだいたい揃ったな。一人風邪でいない人はいるがこれから話を進めていくぞ」

「ごめん雄二。そのいない人って誰なの？」

吉井が質問をする。確かに少し気になっただけはいるがどうせ俺の知らない人物だ。さて俺はそろそろ寝ようかな。

「えっと、名前は由比ヶ浜結衣って名前だな」

「クッ!？」

「どうした比企谷？」

「いい、いえ何でもないです」

不意に出てきた俺の知っている名前に思わず変な反応を示してしまった。由比ヶ浜結衣あいつの存在をすっかり忘れていた。確かに由比ヶ浜の頭ならこのクラスでも不思議ではないしそもそもバカは風邪をひかないっていうのにあいつが風邪で休んじゃったらこの説は嘘ってことになるな。由比ヶ浜とは俺の元クラスメイトでカースト上位にいた人物。見た目はギャルっぽくビッチぽいがそうでもない。とにかく俺の知っている人物だ。

「よし、じゃあ話を進めていくぞ」

俺が由比ヶ浜の特徴を脳内で思いだしている時に坂本が話を再開した。

「今から話すのは皆知っていると思うがこの学校の最大のシステム。そう、試召戦争についてだ」

「ししよせんそう?」

「なんだそれ、食えるのか?」

「バカ、食える訳ないだろ。あれ毒があるんだぜ」

さすがFクラス。この学校の特徴である試召戦争について全くわかっていなかった。この反応に対してさすがの坂本も驚いた。

「お、おい皆知らないのか!? まったくしょうがない、クラス代表である俺が詳しく教えてやる。皆しつかり聞いてくれ」

そう坂本が言ったがすでに半分くらいは寝ていた。

「いいか、試召戦争っていうのはこの振り分けられた設備を奪い合う戦争のことでな、勝ったクラスは負けたクラスの設備を奪うことができる。戦争の方法だがこの学校には科学とオカルトと偶然により完成された『試験召喚システム』って言うのがあってな、これは直近のテストの点数に応じた強さを持つ召喚獣を呼び出して戦うことのできるシステムで教師の立ち会いの下で行使が可能になるんだ。ここまでわかったか?」

いや残念だが坂本皆全然わかってないぞ。

正直俺もいまいち詳しいことはわかっていないがなんとなくぼんやりとは想像ついではいた。

「まあ、まだ皆よくわからないと思うが詳しいことは校則に書いてあるからよく勉強してきてくれ。それと……」

「坂本君。皆さんの自己紹介は終わりましたか？ 終わったなら自分の場所に返ってください。授業を始めますよ。このFクラスの授業は私福原がすべて教えます」

なるほど、このクラスは担任である福原先生がすべて教えるのか。聞いたことあるだろうか、高校で担任がすべて教える学校など。

「わかりました。この話の続きは帰りにするから少し皆残ってくれ」

そう言い残すと坂本は自分の場所へと戻っていった。

そしてこのクラスになって初めての授業がスタートする。この学校は新学期そういう授業がある。まあなんとも勤勉な学校なことだ。

こうして授業が始まったのだが初日なことであって授業には全く集中できなかった。クラスの設備がひどいだけあってクラスの空気は勉強するにはとても悪い空気だった。授業中あちらこちらからする咳の音、特にまだ病み上がりなのであろう姫路の咳の音が目立っていてとてもじゃないが辛そうだった。俺ですら結構きつい環境だ。

そんな環境にも耐えながら授業を受けていて、ちようど三時間の途中だった、材木座

から話かけられた。

「なあ、八幡よ」

「なんだ？」

「試召戦争、とても興味深い話だ。八幡もやりたくなつたのでは？」

「まあ、多少はな」

「我はとてもやりたくて右腕がウズウズしているぞ！早く自分の召喚獣を見てみたいなあ！」

材木座はこの試召戦争にとても興味があるのだろう。おそらく自分の中二心に突き刺さる何かがあるにちがいない。この会話をしたつきり俺は深い眠りについて気づけばもう六時間目の終わりになっていた。

「それでは今日はここまで。授業終わったら流れ解散でいいぞ」

なんて緩いのだろう。普通は帰りのHRとかあるはずなのだが。でも実際帰りのHRって意味ないよね？ ね？

そして先生が教室を出た瞬間、坂本が先生のいたポジションにいきこう話した。

「それで、朝の続きなんだがな、どうだ皆今日一日過ごしてみて。このクラスの設備に不満はないか？」

『おおありじゃあ!!』

クラスの皆が大きな声でそう叫んだ。俺も叫びたかったがそういうのは柄じゃないとすぐに悟りやめた。でも不満はある。そこは皆と同じだ。普段、皆って誰だよとか思っていたがこのときは皆という存在がわかったような気がした。

「だろう？俺だつてこの環境は不満以外なものでもない」

『そうだそうだ！』

『いくら勉強しないからつてこの設備はあんまりだ！』

「ここは国会かな？」

そう思ってしまうほどの大きな賛同の声。

「みんなの意見はもつもだ。そこで俺からの提案なんだがな、このFクラスはAクラスに試召戦争を仕掛けようと思う」

Fクラスの代表、坂本の提案に俺は一瞬言葉を失った。そしてすぐに状況を理解した。このクラス、つまりFクラスは超エリート揃いの集団にテストの点数が強さに直結する試召戦争で勝負しようと言うのだ。

この瞬間Fクラスの戦争の引き金は坂本によって引かれた。